The Japan Society of Educational Sociology

教室内相互行為における生徒の「主体性」について

上田智子（お茶の水女子大学）

1．はじめに—相互行為における「主体性」

本発表の目的は、「教室」や「授業」という社会的空間における相互行為のなかで、生徒の「主体性」がどのように扱われているかを検討し、教育的関係と「主体性」について考察することである。

「主体性」とは、わたしたちの日常的な相互行為を可能にしているさまざまな前提のうちのひとつである。わたしたちが、誰かのふるまいの「動機」や「目的」を推し量るとき、そこには、その人物が、何らかの「動機」や「目的」のもと、「主体性」をもってある行為を選択したという想定が存在する。そして、わたしたちはしばしば自らの「動機」や「目的」が相手に理解されることを期待しながら何らかの行為を行おうとするが、その時、わたしは、相手が自分に「主体性」を想定してくれていることを期待していることになる。このように、わたしたちは、日常的な相互行為において「互いに主体性を前提しあっている」（永田1997）。

このことは、逆にいえば、「主体性」は、その存在を前提としたわたしたちの相互行為を通じて観察可能となるということである。すなわち、「主体性」は相互行為を通じて構成される。さらに、永田（1997）が述べるように、あるふるまいが本当に「主体性」に基づいて行われたのかどうかを証明することは不可能であることから、「主体性」とは、相互行為を通じてしか、その存在を確認することができない理念的構成物である、と言うことができよう。

2．教室内相互行為における「主体性」

以上の理論的前提のもと、本発表では、教室内相互行為のデータや教育実践の報告を用いて、実際の授業場面での生徒の「主体性」の扱われ方を検討し、教室内相互行為において「主体性」がどのように構成されているかを考察する。

既に述べたように、「主体性」は相互行為を成立させる重要な前提の一つとなっている。ところが一方で、わたしたちはしばしば他者のふるまいに対して、「主体性」に基づくものではないというような評価を行うことがある。そして、多くの場合、そのことは「望ましくないこと」とみなされ、もっと「主体性」を持つように求められる。

「教室」や「授業」という社会的空間においても、生徒のふるまいはしばしば「主体性」に基づくものでないという評価を受け、生徒の「主体性」を尊重するような学びの形が追及されつづけている。

しかしながら、「教室」や「授業」という社会的空間において、「主体性」はどのような形で可能となるのか。「教室」や「授業」という「制度」を成立させ維持するような活動と、生徒の「主体性」を尊重することとは、どのような形で両立するのか。「教室」や「授業」のなかで尊重される「主体性」とは、結局は、「制度」によって与えられた「主体性」、ないしは「制度」を媒介として構成された「主体性」という側面を免れないのではないか。以上のような論点に、相互行為データや教育実践報告の分析を通じて接近していきたい。

NII-Electronic Library Service

The Japan Society of Educational Sociology

3.「主体的に学ぶ」とはどういうことか―教育的関係と「主体性」―

近年、「主体性」ということが、「自己決定」「自己責任」を称揚する社会の流れのなかで、ますます重視されつつある。教育現場もまた例外ではなく、生徒の「主体性」が重んじられ、学校やカリキュラムを生徒じしんが「選択」すること、授業において生徒が「主体性」に基づいた学びを展開することなどが、教育改革の重要な目標として位置付けられている。

しかし、「主体性」は理念的構成物にすぎないという、上述の議論をふまえるならば、このように「主体性」を主張することで、何が行われているかということを考える必要があるだろう。土場は、ジェンダー・フリーをポリティクスという観点から考察するなかで、「主体とは、ある政治的関心のもとで、『差異』を『選択』に変換するために要請され、そうした選択を主体の行為というかたちで帰責するために要請される理念的実体」と述べているが（土場　1999)、こんにち教育の世界で、生徒の「主体性」が喧伝されるとしたら、そこにも何らかの政治的関心が存在するのであろうか。あるいは、生徒の「主体性」をことさらに要請することで、教育現場にはどのような帰結が生じるのだろうか。

そこで本発表では、教育に関する議論において、「主体性」ということばが用いられる場面、さらに、教室内相互行為において、「主体性」ということが問題となる場面にも注目する。具体的には、現行の学習指導要領やさまざまな教育雑誌、教育実践の報告などから、「主体的に学ぶ」というときに、どのような「学び」が想定されているのかを明らかにする。また、教室において「主体性」が問題とされるとき、そこで何が起こっているかをみていくことにする。そのうえで、生徒の「主体性」と教育的関係について考察していきたい。

＊当日の発表において、具体的なデータの提示・分析を行う。

＜参考文献＞

市村・天野・増渕編　1996　『教育関係の再構築―現代教育への構想力を求めて―』、　東信堂

土場　学　1999　『ポスト・ジェンダーの社会理論』、青弓社

森田・藤田・黒崎・片桐・佐藤編　1995　『個性という幻想』（教育学年報４）、世織書房

永田えり子　1997　『道徳派フェミニスト宣言』、勁草書房

NII-Electronic Library Service